

タイトル:平成 24(2012)年度 教育セミナー

日時:平成 24 年 9 月 14 日(金)～17 日(月・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「思想史研究の諸問題」

小林 春夫 (東京学芸大学)

今回の講義ではイスラーム哲学を研究する上で重要と思われる問題について考察し、比較的最近の研究動向についていくつか紹介した。

まず 19 世紀のフランス人思想家 E.ルナンとイスラーム改革者として知られるアフガーニーとの対話に言及した。そこで両者はイスラーム(宗教)と「サイエンス」(学知=哲学・科学)を対立するものと捉えている。このような理解は、その後の研究の進展にもかかわらず根本的な修正を加えられることのないまま、いわば暗黙の了解として生き続けているのではないか。しかし実際には、哲学・科学はイスラーム的学問(伝承的学問)とされる分野の研究と密接に結びついて発展してきたのであり、著名なムスリム学者の多くは双方の学問領域に通暁していたのである。

以上の問題と関連して、イスラーム世界における哲学・科学の発展をどのように理解するかも重要である。上記ルナンのように、イスラームの文明史的意義は古典文明(ギリシア・ローマの学術)を西欧世界に伝達したことにあるのであり、13世紀以降は「衰退」したとする西欧中心主義的な主張は下火になったと言えるかもしれない。しかしイスラーム世界内部における哲学・科学の発展、とりわけ13世紀以降について、本格的な研究は、端緒についたばかりであると言わなければならない。

最近の研究動向を示唆する事例を挙げておこう。哲学史の分野では、哲学とカラーム(イスラーム神学)との関係が注目されている。イブン・スィーナー(1037 年没)はイスラーム思想史の分水嶺に譬えられる学者であるが、従来はギリシア哲学の大成者としての評価が高かった。ところが最新では、カラームからの影響および12世紀以降のカラーム(またイスラーム思想全般)への影響に関心が集っている。次に論理学史の分野では、法学を中心とするイスラーム的高等教育機関とみなされてきたマドラサにおいて、アリストテレス論理学がさかんに研究され教授されてきたことが、時代的・地域的特徴とともに明らかになりつつある。さらに科学史の分野では、イスラームと科学の関係(敵対的か親和的か)、科学の社会的基盤(研究の担い手とパトロンの問題)、イスラーム世界における科学の「衰退」などが問い直されるとともに、数学・天文学・医学などの理論的・応用的分野における実態解明が進んでいる。

最後に筆者自身の研究テーマを紹介する目的で、「照明学派」とよばれる哲学派におけるテキストの伝承と注釈について、写本資料などを示しつつ解説した。